

女子学生に向けて発信される就職情報の変遷

問題意識・目的

現在の日本では、高等教育における男女の進学率が上昇しているものの、就職後の働き方には依然として性差が見られる。本研究では、就職活動時に就活メディアが女子学生に向けて発信する情報を検討し、就活過程こそが女子学生の結婚・出産といったライフイベントへの意識形成に影響を与えうるものであることを明らかにした。

研究方法

この研究では、1984年に創刊された『就職四季報女子版』を分析対象とし、各企業の掲載ページにおける掲載項目および記載内容について分析を行った。まず、1985年版から最新の2025-2026年版までの掲載項目から変遷を確認し、総合版と比較することで、女子版特有の項目を明らかにした。次に、各企業が自由記述で回答している「四大卒・短大卒女性社員の役割」という項目の具体的な記述内容を、AIテキストマイニングによる係り受け解析により分析し、時期ごと・業界別に比較した。

結果・考察

掲載項目では、創刊号から最新号まで一貫して継続したものとしては、主に産育休制度に関する情報であり、近年では両立支援制度など長期的なキャリア形成に関わる項目が増加した。総合版と女子版を比較すると、総合版ではキャリア形成と採用・待遇に関する情報が、女子版に産育休と福利厚生に関する情報が掲載される傾向にあった。記述内容分析では、1985年版から1989年版では「男性が多い」「女性の活躍」「女性の感性」、1990年版から1994年版では「女性の戦力」「女性の進出」、1995年版から2000年版では「女性と働きやすさ」「男性と同等」という係り受けが多く見られた。業種別では、建設業は「女性の活躍」や「女性の進出」が多く、小売業では、「女性の感性」や「女性と働きやすさ」「男性と同等」が多かった。

これらの結果から、男女雇用機会均等法の制定以降今日に至るまで、雇用機会における性差別の撤廃や女性の長期的なキャリア形成が促進されてきたものの、就活メディアが女子学生に伝える情報は、出産・育児等のライフイベントに関わるものが中心という傾向は大きく変化していない、ということが明らかとなった。このことから、就職活動の過程そのものが、女性学生に対して、そうしたライフイベントを意識させ、ライフイベントを考慮した働き方を選択させるような効果をもたらしている可能性が示唆された。

ガクチカ目的のボランティア活動が学生団体メンバー間の関係性に及ぼす影響

研究目的

本研究では、学生生活で力を入れた活動(以下、ガクチカ)として就職活動(以下、就活)でアピールするためにボランティア活動をする参加者の存在をめぐって、学生ボランティア団体のメンバー間の関係性に生じる問題について検討することを目的とする。先行研究では、学生のボランティア参加において利他性と利己性の参加動機が葛藤することなく共存すること、ガクチカや就活の観点からのボランティア活動の有益性が明らかにされているが、学生ボランティアをガクチカという視点から批判的に検討した研究は見当たらない。そのため、本研究では、ガクチカ目的の参加者との関係性に生じる問題を検討する。

研究方法

2024年8月から10月にかけて、海外への支援活動を実施している東海地方の学生ボランティア団体に所属している大学3・4年生7名(ボランティア活動自体を目的とするメンバー4名、ガクチカ目的のメンバー3名)を対象としたインタビュー調査を行った。ボランティア活動をガクチカで話すことについてどのように思うか、参加理由が異なるメンバーとの関係性等に関する質問項目について回答を求め、詳細なエピソードを聞き出していった。

結果と考察

インタビュー調査の結果、調査対象者全員がガクチカにボランティア活動を活用することに賛成していた。しかし、その理由や捉え方には個人差が見られ、活動経験や成果を自己成長や行動力として語る者もいれば、企業のニーズに応じて他の経験と使い分ける者もいるなど、参加目的や姿勢の違いが影響を与えていた。さらに、ボランティア活動自体を目的とするメンバーは、ガクチカ目的のメンバーに不満を抱きつつも、配慮をもって接している様子が窺えた。一方、ガクチカ目的のメンバーは、他のメンバーに迷惑をかけないように心がけていたものの、ボランティア活動に対して積極的ではなく、またその参加目的が主要メンバーとのプライベートな関係性や信頼関係にも影響していることが確認された。このことから、参加目的の違いが、メンバー間の関係性に微妙な摩擦を生じさせる一因となっていることが示唆された。

以上の結果から、大学生の課外活動における人間関係は、参加目的や役割分担によって大きく影響を受けることが明らかになった。特に、ボランティア活動では、ガクチカ目的のメンバーとボランティア活動自体を目的としているメンバーとの間に認識のズレが生じることが多い。ガクチカ目的のメンバーは、就活でのアピールに直結するような活動に焦点化しがちなため、これがメンバー間の摩擦を引き起こす原因となる。ボランティア活動自体を目的としてリーダー的役割のメンバーは、活動を円滑に進めるために適切な距離感を保ちつつ協力関係を築こうとするが、内心ではガクチカ目的のメンバーを受け入れられていないのではないかと考えられる。

大学スポーツの強豪校はどのようにチーム作りを行っているのか —東海地区の女子ラクロス部を対象に—

問題・目的

本研究は、大学入学以前に競技歴を持つ選手やスポーツ推薦入学の選手がいないチームが強豪校となっていく過程で、どのようなチーム作りが行われているかを明らかにした。

大学スポーツのチーム作りに関する先行研究としては、大学スポーツ組織の目的達成へ向けたプロセスを検討した川岸・栗田(2021)や、メンバーの達成動機を検討した樋口(1996)がある。しかし、これらの先行研究の知見では、チームの組織風土やメンバーの意識が、チーム作りそのものによってもたらされているのか、それとも個々の部員の入部経緯や大学部活動の重要性によってもたらされているのかは、判然としない。

そのため、本研究では、大学入学以前に競技歴を持つ選手やスポーツ推薦入学の選手がいないチームが強豪校となっていく過程で、どのようなチーム作りが行われているかを検討することとした。

方法

過去 10 年間の東海地区女子ラクロスリーグ戦において優勝および準優勝の成績を多くおさめている強豪校チームを、それ以外のチーム(以下、一般校)と比較検討した。強豪校と一般校をそれぞれ 2 校ずつ取り上げ、各チーム主将 4 名に対して、2024 年 8 月～9 月にかけてインタビュー調査を行った。調査は、半構造化インタビュー方法で行い、チーム作りに関する 8 つの質問を尋ねるなかで、対象者の回答次第で詳細や付随するエピソードなどを聞き出していった。

結果・考察

強豪校と一般校のチーム作りでは、チーム目標と部員数において差がみられた。チーム目標は、一般校では東海地区に勝利することであったが、強豪校ではよりレベルの高い関東や関西のチームに勝利することであった。部員数が多いと、スタッフの分業や練習中のメリハリのある雰囲気づくりをすることができ、質の高い練習に繋がっていた。一般校では、部員数が少ないためにスタッフが不足し、プレイヤーがスタッフ業も行わざるを得ない状況であった。一方強豪校では、スタッフの人数が多いため、練習のタイム管理、練習や試合でのデータ分析や怪我人のテーピングなど、スタッフ業を細かく分業できる体制となっていた。部員数の多さは、スタッフ業の充実と組織体制の充実につながり、あらゆる面でチーム力向上に影響を与えていた。さらに、現部員数の多さは、新入生募集活動の充実度にも影響を与えていることが明らかとなった。

本研究の意義は、スポーツ推薦等での入部者が皆無の大学運動部にあって、強豪化する要因を明らかにしたことにある。しかし、本研究の調査対象は、女子ラクロス部のみであったため、男子ラクロス部や、初心者だけで構成されている他の大学スポーツについても、本研究の知見が当てはまるかどうか、本研究の残された課題である。

「宗教 2 世」の語られ方 —安倍晋三元首相銃撃事件以前と以後を比較して—

問題・目的

2022 年 7 月 8 日、安倍晋三元首相が奈良市で街頭演説中に「宗教 2 世」の容疑者に、手製銃で銃撃される事件が起こった。この事件をきっかけに、「宗教 2 世」が自身の苦しみや葛藤を世に発信することが増え、「宗教 2 世問題」が社会問題として認識されるようになってきた。本研究は、この安倍事件前後の新聞報道を用いて、「宗教 2 世」がどのような存在として社会的に認識されてきたかを明らかにした。

方法

本研究では、安倍事件が発生した 2022 年 7 月 8 日より前と、それ以降とに分けて、新聞報道における「宗教 2 世」の語られ方を分析した。「宗教 2 世」を見出しと本文に含む新聞記事の抽出には、朝日・中日/東京・毎日・読売の主要 4 全国紙のデータベース（「朝日新聞クロスサーチ」、「中日新聞・東京新聞記事データベース」、「毎索（マイサク）」、「ヨミダス」）を使用した。2022 年 7 月 8 日より前の記事は、『朝日新聞』では、2 件（いずれも 2021 年）、『中日・東京新聞』では、1 件（2021 年）、『毎日新聞』では、2 件（2021 年と 2022 年に 1 件ずつ）、『読売新聞』では 0 件であった。2022 年 7 月 8 日以降の記事は、『朝日新聞』では、118 件、『中日/東京新聞』では、60 件、『毎日新聞』では、102 件、『読売新聞』では、113 件がヒットした。

分析は、テキストマイニングソフトである KH Corder を用いて行った。見出しと本文における頻出語を抽出し、また、各新聞社の特徴語を探るため、対応分析を行った。

結果・考察

新聞記事を用いて分析を行った結果、安倍事件の前後で「宗教 2 世」の語られ方に違いがみられたことが明らかになった。安倍事件より前と後で、「宗教 2 世」に関する記事の量が明らかに増加した。安倍事件後の記事では、安倍事件前には注目されていなかった、教団の活動の問題性や、それに対する国の対策が講じられていることが語られていた。また、安倍事件前は、「宗教 2 世」の問題が、信仰を中心とした生育家庭に関わるものであることと、親を介して教団や教義と関わることに伴う苦悩として語られており、「宗教 2 世」の問題は個人的な悩みとみなされていたことが分かった。一方、安倍事件後は、「宗教 2 世」自身による苦悩や葛藤などの積極的な発言があり、親からの信仰の強制や教義に基づいた子育てが虐待として語られるようになったり、献金などの経済的な困難に関する問題にも言及されるようになったりした。安倍事件以降、「宗教 2 世」は、個人的な悩みではなく、社会問題として語られるようになった。

本研究では、先行研究で検討されていなかった、「宗教 2 世」の存在がどのように報道されて、どのように語られてきたかの分析を通じて、「宗教 2 世」が社会問題として語られるようになったことが明らかとなった。本研究の限界として、新聞報道のみを扱った点があげられるが、「宗教 2 世」当事者が自由に発信できる SNS などにも着目してみると、さらに新たな知見が得られたであろう。

学校行事への認識からみる不登校傾向に関する検討

問題・目的

不登校の児童生徒数は増加傾向にあり、とくに中学校では深刻である（文部科学省、2023）。不登校の要因の一つとして、人間関係トラブルが考えられる。不登校に関する先行研究では、学校行事に触れているものはあるものの、これを中心に研究したものはほとんど見当たらない。一方で、不登校と性差に注目し、女子における人間関係の困難と不登校の関係について指摘する研究がある。そこで本研究では、集団活動を伴う学校行事に着目し、不登校傾向と学校行事への認識は関連をもつのか、またそこに性差はあるのかについて検討することを目的とした。

方法

2024 年 11 月 5 日から 15 日にかけて、大学生 1 年生から 4 年生を対象に、Google フォーム上で作成されたアンケートに回答を求める形で質問紙調査を実施し、142 件（男性 55 名、女性 87 名）の回答を対象に分析を実施した。中学生時代を想起してもらい、不登校傾向尺度と、学校行事への認識尺度の 2 種類の尺度を用い、計 35 の質問項目への回答を求めた。

結果・考察

相関分析の結果、不登校傾向と学校行事への認識との間には一部関連があることが示された。男女別にみると、学校行事における集団活動で人間関係のトラブルが生じた際、女子は精神的・身体的負担を感じて不登校傾向につながりやすいということが明らかになった。また、学校行事におけるグループメンバー構成に関する質問項目では、女子のほうが 3 つすべての平均得点が高く、女子は学校行事においてメンバー構成を重視する傾向があった。本研究の結果から、学校での人間関係や教室での居場所感が児童生徒の不登校傾向と関連する可能性、そしてとくに女子は学校行事における人間関係によって精神的負担を感じる事が多く、不登校傾向につながる可能性があることが示唆された。一方で集団活動を伴う学校行事における多様な人々とのかかわりが成長の機会として機能する側面もある。ゆえに、学校行事を、人間関係に伴う負担感を軽減しつつも、自己の成長や学校の意義・楽しさを感じられるようなものにしていくことが理想的であると考えられる。

BL 漫画におけるゲイ表現の変容 —1992 年「やおい論争」の前後を比較して—

問題・目的

BL(ボーイズラブ)は、男性同士の愛を主題とするマンガや小説などの1ジャンルで、その市場規模は年々拡大し、近年は映像メディアにも進出している。BL の特徴の変遷については、藤本純子(2007)や西原(2012)などがあるが、ゲイ男性による BL 批判を発端とする「やおい論争」前後での変化については検討されていない。本研究は、「やおい論争」前後の BL での男性同性愛描写の変化について明らかにすることを目的とした。

研究方法

商業出版された BL 漫画を網羅的にリストした堀・守編著(2000)『BL の教科書』掲載の「引用・参考作品リスト—マンガ編」から、ゲイ男性による BL 批判を発端とする、いわゆる「やおい論争」が起こった 1992 年をまたいで長期連載している『ツーリング・エクスプレス』シリーズ(河惣益巳)と『絶愛』シリーズ(尾崎南)の2作品を選定し、調査対象とした。両作品での男性同性愛に関するセリフをデータとして抽出するとともに、登場人物の性的指向性の設定を検討した。さらに、「やおい論争」の前(第1期)と後(第2期)とで、セリフデータのテキストマイニングによる分析結果を比較検討した。

結果・考察

『ツーリング・エクスプレス』シリーズでは、性的指向性の設定がなされていた登場人物のうち、過半数はゲイまたはバイと設定されており、残りはゲイ・バイではないと設定されていた。『絶愛』シリーズでは、主人公の男性同士のカップルの双方が、ゲイ・バイではないと設定されていた。セリフにみられる頻出語としては、両作品で「男」「好き」が、第1期・第2期ともに上位を占めていた。第1期に上位にあった「女」は、第2期には相対的に減少していた。また、第1期にはみられなかった「ゲイ」が、第2期には出現した。このように、男性同士の恋愛にも関わらず、特に第1期に異性愛のアナロジーが多くみられた。BL での男性同性愛の描写は、実際の同性愛の実態とは異なるものの、「やおい論争」後は表現的な配慮もみられるようになった。本研究から、BL は「ゲイ表象を横奪している」という批判に向き合う形で一定変容してきたと推察される。

推しへの恋愛感情と現実の恋愛感情は異なるのか

オタクは恋愛や交際を忌避するものであるという偏見が存在している。このような偏見の根底には、推しへの恋愛感情と現実の恋愛感情は異なるものである、という固定観念がある。本研究では、そもそも推しへの恋愛感情と現実の恋愛感情は異なるものなのか、について検討することを目的とした。

第2章では、「オタクの恋愛関心」に関する先行研究について検討した。先行研究は、推しへの恋愛と現実の恋愛を異なるものとして扱っていることによって、オタクの恋愛関心の有無についての見解が分かれている。これは、先行研究における「恋愛」の概念が狭いために、「オタクの恋愛関心」を検討するには限界があることによると考えられる。

第3章では、歴史学・心理学・社会学の各領域において、「恋愛」概念がどのように変遷してきたを検討した。その結果、恋愛のあり方は時代によって変わっていくものであること、全ての人が恋愛に対してポジティブな感情を持っていたり、積極的だったりするわけではないこと、近代に登場したロマンティック・ラブ・イデオロギーは、1990年代に衰退しつつも、依然として根強く残っていることを確認した。

第4章及び第5章では、「推し」と「恋愛」の定義の検討を行った。本研究では、「推し」を2次元・3次元を問わず、なんらかの好意と情熱を持って特別に応援したいと思う対象、「恋愛」を親密性・情熱・コミットメントを含み、相手との距離を縮めることを望み、その関係を持続させようとする、と定義した。

第6章では、「推し」と「恋愛」の比較を行った。推し活を行う人の事例の検討から、握手会を通じて相手との近い関係を持続させようとしたり、自らの推し活を恋愛や交際のアナロジーで語ったりする人がいることが分かった。一方、相手との距離を縮めることを望まず推し活をしている人もいた。また、「推し」と「結婚」したと主張する人たちの事例から、リアルには存在しない2次元キャラクターに対する恋愛感情は、相手からの好意が返ってこないという点で、片思いと同じであると言える。

以上のことから、推しへの恋愛感情は現実の他者に対する恋愛感情と同様の側面をもつものであると考えられる。ただし、推し活を行っている人の中には、推しへの感情と現実の恋愛感情を別物として考えている人もいる。そのような人について検討できなかったことは、本研究の残された課題である。